
15世紀、朝鮮王朝仏画にみられるチベットの要素をめぐって
—昭恵王后による明仏教文化受容の一側面—

朝鮮王朝仏画では、《薬師仏会図》(1477、ソウル・Leeum 美術館蔵) や《五仏会図》(15世紀末、兵庫・十輪寺蔵) を初発的な作例とし、15世紀前半以降、描かれる尊格の形姿において、尖頭形の肉髻、面長の顔、細くしまった腰の表現などの新しい要素が見られ、チベット仏教の影響として広く認識されている。しかし、こうした新しい要素が顕在化した経緯や道筋について、これまで具体的かつ明確な説明がなされているわけではない。

この課題に対して、本発表では、まず、朝鮮王朝仏画におけるチベットの要素の顕在化は、チベット仏教を直接的に受容した結果ではなく、明の仏教文化の受容の過程の中で発生したという観点を明らかにする。

そもそも、当時の王室周辺において、チベット仏教が盛んに信仰された形跡はない。またチベットの要素とは、尊格の身体的特徴にとどまるもので、尊格の名称やその構成を規定する図像は、チベット仏教に由来しない。さらに当時、朝鮮王朝を冊封していた中国では、明の宮廷を中心にチベット仏教を信仰し、それを優遇する宗教政策がとられていたことも念頭に置いておきたい。こうした事実は、朝鮮王朝仏画にみられるチベットの要素が、中国明との同時代的な関係性を背景に、明の仏教文化の積極的な受容の過程で発生したとする観点を、より盤石なものとする。

次に本発表では、朝鮮王朝仏画にチベットの要素が顕在化した経緯や道筋を明らかにする。この問題に関連し、先にあげた《薬師仏会図》と《五仏会図》の制作にあたって、いずれも第9代成宗の生母・昭恵王后(1437-1504)が深く関わっていた事実は、きわめて重要である。昭恵王后は、最高位の領議政府事として活躍した韓確(1403-1456)の娘にあたり、二人の叔母は、それぞれ明の永楽帝と宣徳帝に納妃され、皇帝の寵愛をうけて権勢の中心にあり、明の宮廷における仏教信仰の担い手でもあった。また、朝鮮出身の宦官として明と朝鮮の間で強力な影響力を行使した鄭同(1412/16-83)は、明では、昭恵王后の二人の叔母に近侍し、明の使節として来朝した際には、チベットの要素が反映された版本を含む明の皇帝勅撰の仏書をたびたび持参したことが資料によって確認できる。

昭恵王后は、こうした親族同士による紐帯と朝鮮出身の宦官の活動を軸として、当時の朝鮮王室における明仏教文化の受容の中心にいたのである。昭恵王后の影響下で制作された Leeum 美術館本《薬師仏会図》が、同じ年に明の宮廷で制作されたオレゴン大学本《薬師三尊十二神将図》(1477、明・成化13年、Oregon・Jordan Schnitzer Museum 蔵) と極めて近似することは、その有力な証左となる。15世紀後半の朝鮮王朝における仏事の有力なパトロンであった昭恵王后の出自とその活動は、図らずも、朝鮮王朝仏画におけるチベットの要素が拡大・展開していく事象を支援する大きな要因であったと結論づけられよう。